

鐘ヶ岳登山を通して学んだこと

11月18日、日曜日。今日はこのところ1番の秋晴れで厚木についたところには太陽の光がまぶしく、高地で気温は低いのに、着ていた上着を脱いで、半袖になる人がいるほど、あたたかく、まさに登山日和な日であった。いつも生活している騒がしい町の空気とは違い、はっきりとわかるほど、空気は澄み切っていて、これこそ、おいしい空気、もう何年も味わっていなかったこの空気を実感することができた。一緒に登ったAさんをはじめ、アルプ山の会の人々は生き生き、はつらつとしていて、まったく年齢を感じさせないほど元気で心も体も若い人たちだった。私が登りの道中、土に足をとられたり、階段を登る度、息をあげていたのに、皆さんは大きな声で楽しそうにおしゃべりをしたり、声をかけてくれたり、とても頼もしかった。どこからそんな元気がくるのだろうとも疑問に思ったが、小さなどんぐりやまだ紅葉しきってない木を見ては微笑む姿に、この自然が元気の源であることが感じられた。

全盲のAさんのサポートをするとき、はじめはこんな大役を自分がやって本当に大丈夫だろうか、ただでさえこんな足場の悪い場所で、Aさんを危険な目にあわせることなく、無事導けるだろうか不安だった。Aさんが頼りに私のリュックからのびる、たった1本の紐だ。この紐がAさんの命綱のようであった。しかし、目が見えていないのはもしかして嘘なのかな？と思うほど、彼女はすらすらと危険な山道を危なげなく歩いている。でこぼこみち、つまづきそうな階段も立ち止まることなく歩いていた。そんな道中、彼女は『Mちゃんのトレーナーの色は何色？靴は何色？髪の毛の色は？』と私を質問責めにしてきた。その時、私のような健常者がAさんのような全盲の方にできることは、彼女の目になることだと気づいた。私は、イメージがふくらむように、できるだけ細かく伝えた。『Mちゃんは声も名前もかわいいね、女優さんだね』と言われると、嬉しいがくすぐったい気持ちになってしまった。きっと、Aさんの頭の中には本物より遥かにかわいく美化されたMが映っているにちがいない。そんなにせ女優・MはAさんの目になれるよう、カメムシのメタリックな色。おじぞうさんの顔など細かく伝えた。普段、私は人と話すとき、相手がわかってくれているというどこか以心伝心のような意識があるからだろうか、きちんと伝えることの難しさを思い知った。この花がどのように綺麗か、このおじぞうさんの顔はどんな表情か、その思いはちゃんと伝わただろうか。

今回の登山で感じたことは人の能力の無限の可能性と、介助において、なんでも手伝おうとするのではなく、その人ができることを考え、その人が何を必要としているか、そのかけたところを補うのが大切だと感じた。

そして、二日目に筋肉痛がきたこと、若いのにこんな運動不足なんて情けない。次回の12月の登山に向けて、毎日ウォーキングをして体力づくりをしようと試みた、自然から自分の体力まで、そんな色々なことを教えてくれた登山であった。